米山新田と米山用水（堰溝）

～米山宗隆・米山宗持と円座の人々の苦闘のたまもの～

米山用水は、三重県伊勢市横輪町（よこわちょう）の横輪川の米山用水頭首工（とうしゅこう、写真①、河川から用水の取り入れ口、おせん淵の少し下流）から上野町を通って、円座町（えんざちょう）まで続いています。全長約7.6kmあります。円座町の人々は米山用水を『堰溝（ゆみぞ）』と呼んでいますが、ここでは米山宗隆（むねたか）さんと米山宗持（むねもち）さんの功績に敬意を表して、『米山用水』と記載します。

①横輪川の米山用水頭首工（右奥が取入れ口）

1　米山新田と米山用水

昔、沼木村（ぬまきむら）円座（現在の三重県伊勢市円座町）は少し高台にあるため、宮川が村のすぐとなりに流れているにもかかわらず、水利が悪く、ほとんど荒れ地になっていました。そのため、米の収穫量は少なく、村の人々は麦やあわ（参考①）を食べて、苦しい生活をしていました。

米山宗隆（むねたか）

江戸時代の元禄2年（1689年）に、紀州藩（きしゅうはん）円座組の大庄屋（おおじょうや、参考②）であった米山家4代の米山宗隆（参考③）さんを中心に、村の人々と力を合わせ、新田（しんでん、参考④）をひらき、約5.5kmの水路（参考⑤）の工事を始め、7年後の元禄9年（1696年）に工事は完成しました。水は上野町にある大熊山（おぐま（やま）、参考⑥）の谷川から引きました。機械の無い当時は、鍬（くわ）でみぞを掘り、高い所はけずり、「もっこ」（参考⑦）で土を運び、低い所を埋め立てる重労働の仕事でした。これにより県道伊勢南島線（なんとうせん）沿いの約7ha（ヘクタール）（参考⑧）の良い田を得ました。水路の水のおかげで、新田には、稲が実り、畑には、茶やこうぞ（和紙の原材料となる植物）が栽培されました。

米山宗持（むねもち）

1　130年以上経って、用水路は土手がくずれ、土砂がたまり、雑草がしげって使えなくなっていました。水が入らないために、新田は3haしか米を作ることができませんでした。9代の米山宗持さんはその水路が荒れているのを見て、前の美しい水田にしたいと考えました。滋賀県の信楽（しがらき）にあった代官所（だいかんしょ）に工事の願いを出しましたが、許可されませんでした。そこで、江戸（今の東京）に行き、江戸幕府（ばくふ）の老中松平定信（ろうちゅう　まつだいらさだのぶ）に申し出て、やっと許可をもらいました。（参考⑨）

2　文政12年（1829年）に村人と共に工事を開始しました。横輪川より約7.6kmの水路を開く計画でした。横輪川の上流に井堰（いせき、堰ともいう、水を他へ引いたり流量を調整したりするため、水をせき止める所、写真②）を作り、横輪川の水を分けて流す工事でした。井堰は土や石を積んで作りました。横輪川に並行（へいこう）して大熊山（おぐま（やま））と日向山（ひなたやま）のふもとに沿ってみぞを掘りました。水路の高さは提灯（ちょうちん）のあかりで高さを決める提灯測量（参考⑩）で測りました。水路は台法寺山（だいほうじやま）をこえないと、水が円座に流れません。それで、約150mのトンネル（隧道、ずいどう）を掘りました。トンネルは現在の上野台団地の近くで、サニーロードの下を横切って、通っています（写真⑬⑭）。方向磁石（参考⑪）と水準器（参考⑫）

②現在の井堰（いせき）

を使って、トンネルの方向や傾きを決めて、石ノミと槌（つち）だけで岩をけずり、土を「もっこ」を使って外に運び出しました。あかりは「がんどう」（参考⑬）を使いました。掘った所は木を組んで支えを作りました。天保2年（1831年）に、7.6㎞におよぶ長い水路がほぼできあがりました。

3 しかし、1831年の7月に大雨が降り洪水によって、せっかく作った水路は切れて、トンネルもくずれ、水路のほとんどは使えなくなりました。ここで、宗持さんはあきらめませんでした。米山家の財産をすべて投げ出し、かつ米山新田を担保（たんぽ、借金のかたに保証として差し出す物）にして、借金をしました。天保3年（1832年）にもう一度、工事を再開しました。トンネルには、愛知県の三河（みかわ）の丈夫な石（参考⑭、写真③）で支えをしました。

③トンネルに使用された三河産の花崗岩の石材の一部（長さ約 1m）

【現在：大水が出た時に、あふれた水を横輪川にもどす仕組み（「うてび」と呼ばれる、参考⑮）がいくつかの所にあり、水路には、「うてび」の標識（写真④～⑦は第1うてび）があります。また、大雨の時、流量によって自動的に動く「転倒ゲート」（参考⑮、写真⑧⑨）も設置されています。】

④第1うてび（全体）、左が横輪川

⑤第1うてび

⑥うてび（上側が用水路）、水量が多いときは下側の水路で横輪川に戻す

⑦第1うてびの出口

⑧転倒ゲート

⑨洪水時に転倒ゲートのステンレス製のシリンダーが下に作動しゲートが倒れる（前方中央にゲートのシリンダーがある）

4 米山用水はやっと完成し新田の約10haと廃田の約27haに灌漑（かんがい、水を引くこと）することができました。村人は用水を引いた水田で米作りに励みました。

5 宗持さんはこの工事に私財1389両を投じただけでなく、円座村は新田を担保に1000両の大きな借金（村全体で保証する借金）を背負い込みました（参考⑯）。この後、不運にも、大凶作（だいきょうさく、農作物の生産が非常に悪いこと、天保の大飢饉（てんぽうのだいききん））（参考⑰）にあい、米の収穫が減って、借りたお金が返せなくなりまし

た。返せないと、担保にした新田を取られてしまいます。宗持さんは借金の責任を取って、天保10年1月23日（1839年）にみずから切腹（せっぷく）して命を絶ちました（参考⑱）。

円座邨（村）墾田碑（えんざむらこんでんひ）と現在

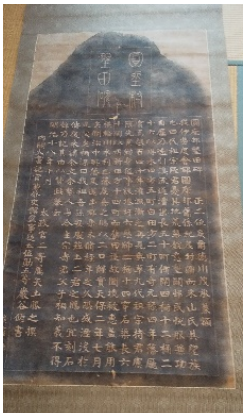
1 それから37年後、明治9年（1876年、11代の宗寿（むねとし）さんの時）に、村中の人々の結束と努力と蓄財によって、やっと1000両の借金を返すことができました（参考⑯）。

明治18年（1885年）に、円座村をはじめ、三重県内および三重県外の有志の人々は米山宗隆さん、宗持さんの立派な仕事に感謝して、米山新田の真ん中に、円座邨（村）墾田碑（えんざむらこんでんひ）を建てました（後述の「2 円座村墾田碑」参照、写真⑩⑫）。その功績を今も世の中の人々に伝えています。

沼木地区の先人（せんじん）の知恵や自己犠牲（ぎせい）をいとわない心に、今の私たちは学ぶところが多いです！

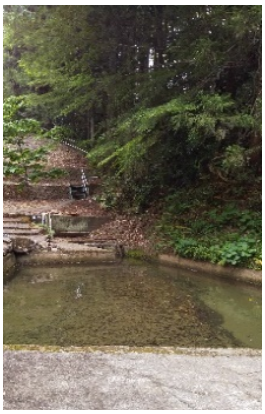
⑩円座村墾田碑と弁天さん（弁天さんは写真の左側）

⑪米山さんの説明を聴く（米山新田の解説案内板の前）



⑫円座邨墾田碑の拓本（米山氏所蔵）上部には元紀州藩主 徳川茂承（もちつぐ）の篆額（てんがく）が添えられている

2 昭和50年（1975年）に、サニーロード（南伊勢広域農道）の開通工事のさいに、サニーロードの下を横切っているトンネルが埋まってしまわないように、伊勢市役所がトンネルをコンクリートで修理しました(参考⑲)。



⑬台法寺山を貫く約150mのトンネル（隧道、ずいどう）の入口（前方奥）

⑭約150mのトンネルの出口（上野台からサニーロード沿いの反対側）

⑮トンネルを出たあと（上野台付近）

3 円座町の人々は米山用水を『堰溝（ゆみぞ）』、頭首工を『奥の堰（おくのゆ）』(参考⑳)と呼んでいます。

⑯円座町・米山新田の用水入口付近（2023年6月7日）

⑰円座町・米山新田（2023年6月7日）

現在、米山用水は3面がコンクリート製の溝に改修されています（昭和57年～昭和60年（1982年～1985年））。この工事の施工は伊勢市円座町の株式会社森組が行いました。森組の（故）森　茂さんが山中隆雄さんの小説『横輪川悲歌』（資料9）のあとがきの後で「偉大なる郷土の先覚者　米山多右衛門宗持を偲（しの）ぶ」を書きました。以下にその一節を引用します。

> 「土木事業を営む私は、たまたま昭和57年より昭和60年にわたり、この用水路改修工事（コンクリート水路にする）を行いました。現在の技術・機械力をもってしても大変でした。近代的な建設機械のない当時のこととて、想像を絶する難工事だったと考えられます。職業柄、筆舌につくせぬ苦闘を偲び感慨無量でした。
>
> 水の有無が稲作を、いや人の生死を左右するといっても過言でない時代、水利に恵まれぬ村を貧困から救おうと、米山宗持は横輪川より水路を開くべくその生涯をかけました。とても人間業と思えぬ非凡な着想と技術、生命を抛（なげう）っての行動には、ただただ驚嘆のほかありません。」

毎年、春の田植えの前になると、円座町の住民は「出合い」（であい、地域の協働（きょうどう）作業）で、用水路の掃除（そうじ）や、土手の草刈りをして、田に水を入れる準備をします。田植えが始まると、順番に用水路の見回りを行います。必要に応じて、水の流れを調節します。壊れたところあれば、修理します。6月上旬ごろにはホタルが赤井山（あかいさん）側の用水路の周りを飛ぶのを楽しめます。

⑱米山新田（2023年8月16日）、収穫間近

米山用水は近年になってコンクリートなどで改修・整備され、今日まで管理・利用されています。そのため、米山用水は江戸時代当時の姿のままではありません。しかし、米山用水のルートを実際に歩いてみると、機械を全く使わずに、山野の平らでない荒れ地に約7.6kmの水路を切り拓く当時の工事がいかに困難であったかを体感できます。

4　宗持さんが1811年に開いた曹洞宗（そうとうしゅう）の正覚寺（しょうかくじ）は米山家の菩提寺（ぼだいじ、先祖代々の墓がある寺）です。毎年、盆（8月15日の夜）に境内（けいだい）で「羯鼓踊（かんこおどり）」が行われます。『円座の羯鼓踊』は1964年に三重県の無形民俗文化財に指定されました。

「かんこ踊り」（詳しい解説は資料10参照）

伊勢市円座町に伝わる民族行事で、正覚寺境内で盆（8月15日の夕刻）に行われます。かんこ踊りは羯鼓（かんこ）という鼓（つづみ）を打ち鳴らしながら踊るので羯鼓踊と呼ばれています。「かっこ」がなまって、「かんこ」になりました。踊り手は頭に『シャグマ』という被り物（かぶりもの）をつけて顔までおおい、腰に『シモタ』と呼ぶ菅簑（すげみの）を着けます。羯鼓を腰につるし、両手のバチで打ち鳴らして、念仏の音頭（おんど）に合わせて踊ります。『シャグマ』は白馬の毛でできていて、円筒形で先端はやや開いています。

円座町の羯鼓踊は新盆を迎えた精霊（しょうりょう）・先祖の供養（くよう）や五穀豊穣（ごこくほうじょう）そして住民の安穏（あんおん）を祈願する踊りとして、継承されてきました。起源は慶安（1648～1652）の初期ごろといわれています。円座町の人々の熱意と努力によって、現在400年近く続いています。

米山新田開発の功績に対して、円座町民は米山家の先祖への敬意と感謝の念を持って羯鼓踊の当日に米山家を訪ねて、開始のあいさつをする慣習になっています。

⑲正覚寺境内

⑳かんこ踊り

参考

参考①：あわ：中国から伝わった小粒（直径約1.5mm）の穀物。明治の始めは米より栽培量が多かった。明治末期まで主食のひとつ。

参考②：紀州藩：江戸時代に紀伊国（きいのくに、今の和歌山県と三重県南部）と伊勢国（いせのくに）の南部（1619年から紀州藩領）を支配した藩。藩主は紀州徳川家。伊勢国を治めるために、松阪城に城代（じょうだい、藩主の代わりに城を管理する家臣）をおいた。玉城町（たまきちょう）の田丸（たまる）に田丸代官所があった。

円座組：組には、42ケ村あり、1万2千石あった。江戸時代の円座、上野、神薗だけではなく、広い地域を含んでいた。横輪と下村（しもむら）・菖蒲（しょうぶ）・上村（かみむら）・床の木（いすのき）（現在の矢持町）は江戸幕府直轄領（俗称として、天領ともいう）に属して、四日市代官所、信楽（しがらき）代官所の支配下にあった。円座村は江戸時代には戸数50戸との記載がある。

大庄屋（おおじょうや）：江戸時代の最上位の村役人、身分は農民であるが、米山家は紀州藩の地士（じし）であった。

地士（じし）制度：紀州藩は地域の有力者に対して、土着のまま、武士の身分として取り立てた。苗字帯刀（みょうじたいとう、姓を名乗り、太刀（たち）を腰に差す武士の特権）を許され、村々を統治した。

参考③：米山宗隆：1621年～1702年。元々、姓は越賀（こしか、出身の（志摩市の）越賀が由来）で、名は多一郎であった。断絶していた米山家を継いだ時に改名した。父の越賀隆春（たかはる）が丹波（たんば）の綾部（あやべ）から1635年に円座村に隠退（いんたい）した時に、従ってきた。米山用水を開発する前に、紀州藩から命ぜられて、多気町にある五桂池（ごかつらいけ）の灌漑用溜池（かんがいようためいけ、三重県で最大）を、大庄屋の三谷吉左衛門とともに元締（もとじめ）として、造った（1679年完成）。

参考④：新田と新田開発：日本では、戦国時代に、各大名が国の力を高めるために、米の増産、農地開拓に取り組んだ。戦国時代末期から江戸初期に人口が増加したが、食糧が不足し、主食の米が必要とされた。江戸幕府や各藩のすすめのもと、役人や豪農や商人が中心となって、湖などの埋め立て、台地や谷間の湿地帯などの内陸部の荒れ地でも新田の開拓が行われた。新田開発は大規模な工事で大量の用水を導いて、それまで水利のよくなかった台地や扇状地の中央まで行われた。米山新田はこの例の一つである。江戸時代初期に全国で1800万石（石高（こくだか）で土地の生産性を表した。1石（こく）はおとな一人が1年間で食べる米の量に相当。成人男性で1日に玄米5合。米の１石＝10斗（と）＝100升（しょう）＝1,000合（ごう）。約180.39L。）から後期には3000万石に、倍近く増えた。新田開発のためには、測量技術の進歩があった。新田開発は非常に大きな利益も期待できたが、開発の困難さから資金難のリスクもあって、投資した商人には破産する者もあった。また、新田は、古くからの農地より自然災害のリスクの高い土地が多くあった。本田（ほんでん）：江戸前期の総検地によって決定された田、畑、屋敷。新田：江戸前期の総検地以降に開発された田、畑、屋敷。新田は本田に対する語。墾田（こんでん）：新開発地は古くは墾田といわれた。（例）奈良時代の墾田永年私財法（こんでんえいねんしざいほう）⇒墾田は永久に私有地とすることを認めた法（743年発布）。

参考⑤：米山宗隆が開発した約5.5km（資料1、2、3、5）（資料7では約4km）の水路は、現在「野田崎古溝（のださきここう）」（資料1）と呼ばれている。残念ながら、水路のルートは不明である。米山用水と米山新田の工事に数千両（後述の参考⑯）を使った。

参考⑥：大熊山：上野町の人は「おぐま（やま）」と呼んでいる。神岳（かみがだけ）のふもと付近にある小高い山。南から順に、おぐま、日向山（ひなたやま）、台法寺山（だいほうじやま）がある。今の上野台団地のある場所は台法寺と呼ばれていた。

参考⑦：もっこ：縄や竹・つるを編（あ）んで作った土砂の運搬道具。人がかついだり、せおったり、手で持って運んだ。昭和の初期まで、土木工事は、この「もっこ」で土をいっぱい入れて、棒でかついで、運んでいた。

参考⑧：1ヘクタール（ha）＝100m×100m＝10,000㎡＝約1町。よって、7ha＝70,000㎡。

参考⑨：代官所：今の滋賀県甲賀市の信楽（しがらき）に「信楽役所」と呼ばれた代官所があった。代官は近隣の灌漑を害する（中世から最も多い争い）と、許可を与えなかった。松平定信は宗持の誠意を理解し、調査を命じるとともに信楽代官にも意見を聞いた。もし、近隣の村に損害が生じたときは、米穀で補償することで近隣の村の同意を得させて、許可を与えた（資料8）。

信楽代官所に行ったのは、頭首工のある横輪は江戸幕府領のためであったと考えられる。四日市にも代官所があったが、享和元年（きょうわがんねん、1801年）以降、信楽代官多羅尾（たらお）氏の支配を受けて、四日市には出張陣屋が置かれた。

中世から農業用水をめぐる争いは日本各地で多発し、死活問題であった。

参考⑩：提灯測量：江戸時代から明治時代において、提灯を棒に立てて、夜間に目印として高低差を測量した。多くの人々が提灯を持って並び、提灯の高さを調節することにより測量した。

参考⑪：方向磁石：江戸時代後期に地理学者伊能忠敬（いのうただかか）は日本各地を測量して、精度の高い日本地図「大日本沿海輿地全図（えんかいよちぜんず）」を作成した。このとき、「小方儀（しょうほうぎ）」いう方向磁石を使った。

参考⑫：水準器：江戸時代の水準測量は角材の1面に長いみぞを掘り、その中に水を注いで水平の基準面を定めた。この水準器は水盛り台（みずもりだい）と呼ばれた。一般に水準測量を「水盛り」と称した。

参考⑬：がんどう：江戸時代に発明された携帯用ランプの一種。正面のみを照らし、外観は桶（おけ）状で中央にロウソクを固定した。

参考⑭：三河の石（写真③）：愛知県三河の岡崎市は市内の山から切り出される良質な御影石（みかげいし）と技術力のある石工（いしく）職人で知られている。花崗岩（かこうがん、マグマが深い所で固まった深成岩の一種）は石材になると、御影石と呼ばれる。

参考⑮：うてび（写真④～⑦）：漢字は打樋。樋（とい）は水を送り流すもの。資料1では「ゆせき」と記載されている。

転倒ゲート（写真⑧⑨）：洪水時に流量が多いと、ステンレス製の油圧シリンダーが下に作動し、ゲートが倒れて水路の水を横輪川に戻す。（制作年月：昭和57年（1982年）3月、松阪市の宇野重工株式会社製）

参考⑯：1両の価値：単純に比べることはできない。同じ江戸時代でも、時期や場所によって、値段が異なる。また、何と比べるかでも大きく異なる。米の価格で比べると、1両は江戸初期で10万円、中期～後期で3～5万円、幕末で3～4千円という評価（山梨県立図書館の資料による）もある。あくまでも参考である。

1000両の借金：村全体で保証する借金であった。「郷借（ごうがり）という。円座村の借金のうち、500両を相可（おうか）の大和屋西村三郎右衛門から借りた（資料1、古文書が米山家に保存）。工事は大和屋の直営工事として施工され、工事を円座村で担当した。証文（しょうもん）は、工事の結果増収となる27石8斗5升のうち、20石を永代年貢（えいたいねんぐ）として渡すという内容であった。約72％の年貢を払うという過酷なものであったが、円座村はそれほど切羽詰まった状況であった。

参考⑰：天保の大飢饉（てんぽうのだいききん）：江戸時代後期の1833年（天保4年）から1839年まで続いた。江戸時代三大飢饉の一つ。洪水や冷害があり、大凶作になった。米価・物価が高騰し、非常に多くの餓死者と病人を出した。百姓一揆や大塩平八郎の乱（1837年）が起こり、老中水野忠邦（ただくに）の天保の改革（1841年～1843年）につながった。

参考⑱：米山宗持：寛政2年8月23日（1790年）（資料6）～天保10年正月23日（1839年）。没年は天保10年（正月）であることを米山公美（きみよし）さんとともに米山家の米山宗持の墓石で確認した。資料1、5、8及び「米山新田開発跡」の石碑（墾田碑の右側にある）の没年1842年は誤りである。資料6では没年が天保18年となっているが、これも誤りである（天保は15年まで）。生年の寛政2年も資料6以前の米山家の資料では記述がない。没年時で53歳（資料1）も確かではない（数え年で数えても一致しない）。資料7（後に記載）の没年の誤りは2023年8月に訂正された。

参考⑲：米山用水は、サニーロードの下を横切って、上野町の日向（ひなた）に入り、アジサイの植えてある所と並行している（写真㉑）。米山用水は上野町の日向を通っているので、円座町と上野町の取り決めで、日向の田んぼに水を分けるために、水路の側壁に穴が数か所開けてある。

㉑上野町日向を通る米山用水とアジサイ

参考⑳：堰溝（ゆみぞ）、奥の堰（おくのゆ）：円座町では、近年、「堰（ゆ）」ではなく、「湯」が慣用的に使われてきた。円座町の方から、「ゆ」に対して、「堰」と表記したほうが良いのではとの指摘を受けた。著名な民俗学者柳田國男の著書『故郷七十年』の中にも「堰溝（ゆみぞ）という灌漑用水の掘鑿（くっさく）」との記述がある。「堰溝（ゆみぞ）＝灌漑用水」と考えられる。ご指摘ありがとうございます。

頭首工にある工事銘板（めいばん）（写真㉒）：これによると、頭首工は1959年に復旧工事（工事名：昭和33年度災害復旧事業　円座頭首工復旧工事、竣工（しゅんこう）：昭和34年8月15日、施工者：（伊勢市円座町の）森組　森　茂）が行われた。

㉒頭首工にある工事銘板

2　圓座邨（円座村）墾田碑（えんざむらこんでんひ）

円座村墾田碑（写真⑩）は明治18年（1885年）に、当時の円座村をはじめ、上野村、津村、神薗（かみその）村、佐八（そうち）村、横輪村、下村（しもむら）、菖蒲（しょうぶ）村、上村（かみむら）、床之木（いすのき）村、沼木地区外の三重県内、および三重県外の有志の人々によって、米山宗隆（むねたか）、宗持（むねもち）の功績に賛同して、米山新田の真ん中に建てられました。墾田碑は地域の人々の生活を豊かにするためにつくした二人の功績を今も世の中の人々に伝えています。碑の上部には元紀州藩主徳川茂承（もちつぐ）の篆額（てんがく、石碑などの上部に篆書体（てんしょたい）で彫られた題字）が添えられています。碑の文章は明治の漢詩人、衆議院議員で松阪市射和（いざわ）出身の矢土勝之（やづちかつゆき、号は矢土錦山、きんざん）が作成しました。以下は、この文を中村澄夫さんが解読し

たものをもとにして、簡略化し、かつ現代語になおしたものです（参考①）。（米山新田は1973年に伊勢市史跡に指定され、墾田碑の前に解説案内板（資料7）があります。）

円座村墾田碑（要約）

伊勢の国（いせのくに）度会郡（わたらいぐん）の円座村は、昔、紀州藩主の治める地域であり、米山氏はこの土地の人々から信頼されている家の出身です。4代の宗隆（むねたか）さんは、この地域の荒れ地を嘆（なげ）いて、荒れ地を開墾（かいこん）する決心をし、これに専念しました。この村の人々も喜んで、この仕事に参加しました。遠くから谷川の水を引き、50町（1町＝約109mなので、約5.5km）の長さの水路を作りました。これによって、水田を5町（約5ha）と畑を2町（約2ha）得ました。元禄4年（1691年）に、紀州藩は米山宗隆をほめたたえ、ほうびを与えました。

それから140年後、用水路は水路として役に立たず、田には雑草がはえる状態でした。9代の米山宗持（むねもち）さんは、祖先のした事業が荒れ果てているのを見て、再興（さいこう）しようと働きました。石でできたトンネルを作りましたが、これは長さが60間（けん）（1間＝1.82mなので、約109m、参考②）でした。灌漑（かんがい）用水路をなおして整備することによって、新田が14町（約14ha）得られ、以前の田も含め、昔のように美しい田となりました。これは横輪川をじょうずに利用した水利事業でした。天保2年（1831年）7月に、紀州藩主はすばらしい業績にたいして、米山宗持にほうびとして二人扶持（ふたりぶち、参考③）を授（さず）けました。

この文は米山宗寿（むねとし）さん親子の求めに応じて、矢土勝之（やづちかつゆき）が書きました。

参考①：碑文において、内容が不明なところは省いた。大幅に簡略したところもある（米山家所蔵の墾田碑の拓本は写真⑫）。
書は明治の著名な書家である巌谷　修（いわやしゅう）による。号は一六（いちろく）。明治の三筆の一人と云われている。

参考②：他の資料（1、5）では、約150mとなっていて、一致していない。碑文は残念ながら、現在、こけと汚れのため、ほとんど判読できないが、拓本で確認すると60間となっている。

参考③：二人の大人が1年間に食べる量の米が与えられた。

3　弁天（べんてん）さん

米山宗隆（むねたか）は水路（約5.5kmで、現在「野田崎古溝」（のださきこう）と呼ばれています）を工事の際、水路の安全を祈願（きがん）するために、滋賀県の琵琶湖（びわこ）の北部に浮かぶ竹生島（ちくぶしま）にある宝厳寺（ほうごんじ、竹生島神社（ちくぶしまじんじゃ）とも呼ばれる）・都久夫須麻神社（つくぶすまじんじゃ）で祀（まつ）られている弁才天（べんざいてん、参考①）を勧請（かんじょう、参考②）しました。米山新田の円座村墾田碑（写真⑩）のすぐ後ろに祀られています。円座町の人々は親愛を込めて、弁天さんと呼んでいます。

参考①：日本三大弁才天（竹生島、宮島、江ノ島）の一つ。弁才天は水に関係する神様で、七福神のひとり。元はヒンドゥー教の女神で河の神であった。河辺に居住すると云われていたので、水辺に祀られた。像は琵琶（びわ）、水瓶（みずがめ、すいびょう）などを持ち、音楽・芸術・財運などの女神として信仰されている。弁財天とも書かれる。

参考②：離れた土地から分霊を迎えて祀ること

㉓弁天さん（真後ろは円座村墾田碑で碑の先端が見える）

沼木学びウォーク：米山用水（堰溝）のルートをたどる

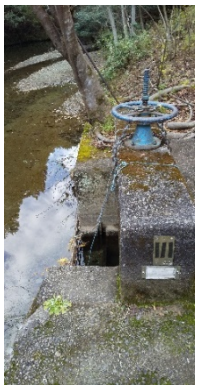
沼木まちづくり協議会　沼木こども自立塾委員会とイベント委員会の共同企画

2022年12月11日（日）8：30～12：00実施

米山用水（堰溝、ゆみぞ）は、三重県伊勢市横輪町の横輪川の米山用水頭首工（とうしゅこう、河川から用水の取り入れ口、おせん淵の少し下流）から上野町を通って、円座町まで続いています。全長約7.6kmあります。全ルートを歩くと、大人でも3時間以上かかります。また、危険と思われる所（写真㉔）もいくつかあります。そのために、当日は歩いて見る所と車で移動する部分を組み合わせて、米山用水のルートをたどりました。

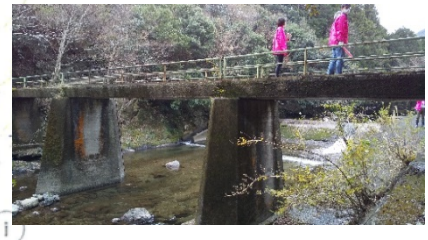
8:30：⓪沼中グラウンド集合⇒みどり保育園バス＆レンタカーで横輪川の①米山用水頭首工へ
⇒9:00ごろ：ウォークスタート⇒転倒ゲートまで歩く⇒②少し戻って宮川パークランド付近の倉ケ谷橋（くらがたにはし）を渡る⇒車⇒③日向（ひなた）からウォーク再開⇒④上野小学校近くを通る⇒⑤米山新田⇒⑥円座邨墾田碑まで歩く。米山用水についての米山公美（きみよし）さんの説明⇒⑦車で沼中グラウンド（12:00解散）

㉔サニーロードから橋を渡り頭首工へ


㉕米山用水の取入れ口
（左側が横輪川）

㉖米山用水の取入れ口

㉗前方に大きい岩。土砂と落ち葉の流入を防ぐために鉄板が敷かれている


㉘倉ケ谷橋

参考資料

1) 西野儀一郎 「ふるさとの人物風土記、度会の巻」、『三重交通株式会社社内報』、p. 66-71、1982年5月、211号（三重交通株式会社）。米山氏と米山新田について詳しい解説がある。

2) 社会科副読本資料作成研究会編 「5地域のはってんにつくした人々」、『3・4年社会科 わたしたちの伊勢市』、p.106-113、2021年版、（伊勢市教育委員会）。写真とイラストで平易な説明があり、15代の米山公美（きみよし）さんのインタビュー記事も掲載されている。

3) 伊勢市教育委員会 「米山新田」、『歴史教材 ふるさと伊勢』、p.12、2020年、小学6年～中学3年向け。

4) 岩田貞雄 「ふるさと再発見 嘉隆の志摩制覇」、2001年10月20日、（中日新聞、伊勢志摩版）。

5) 浜口主一 「ふるさと再発見 米山新田の墾田碑」、2010年9月11日、（中日新聞、伊勢志摩版）。

6) 三重県編 「米山宗持」、『先賢遺芳（せんけんいほう）』、p.131-132、1915年、（三重県）。国立国会図書館デジタルコレクションで閲覧可能。

7) 伊勢市教育委員会 解説案内板「米山新田」、2012年設置。円座村墾田碑の前にある。

8) 伊勢市編 「6米山新田」、『伊勢市史』、第7巻 文化財編、第10章 史跡・名勝・天然記念物、第1節 史跡・名勝、p.578-579、平成19年（2007年）、（伊勢市）。

9) 山中隆雄 『横輪川悲歌』、昭和61年。米山宗持の米山用水開発の苦闘の取り組みを小説で表した。山中隆雄は伊勢市の勢之国屋社長。

10) 沼木まちづくり協議会 「円座の羯鼓踊（かんこおどり）」、p.1-8、2024年、（沼木まちづくり協議会）、https://.numakijin.com

謝辞

この解説は主に西野儀一郎著の資料1をもとに作成しました。（故）西野儀一郎さんに深く感謝いたします。また、資料の提供、原稿の校正などをしていただいた円座町の方々および沼木まちづくり協議会のスタッフの皆さん、ありがとうございました。

西野儀一郎著の資料1の出典については不明でしたが、三重県立図書館に調査相談を行った結果、三重交通（株）の社内報の可能性があるとの指摘を受けました。三重交通（株）に尋ねた所、出典の確認が取れました。三重県立図書館の職員の方々および三重交通（株）の職員の方、ありがとうございました。

作成責任者：沼木まちづくり協議会 立花和也

初版2023年2月25日

第2版2023年6月16日

第3版2023年9月9日

第4版（レイアウト変更および増補） 2024年1月23日

沼木まちづくり協議会

〒516-1104 三重県伊勢市上野町823

（旧沼木中学校）

TEL: 0596-39-7240 FAX: 0596-39-7241

メールアドレス：info@numakijin.com

ホームページ：https://numakijin.com